様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １２ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５０３００８

研究課題名（和文）北アイルランドのミューラルにみるイメージの共同体―学校教育と地域メディアの関係―

研究課題名（英文）Murals in Northern Ireland and Imagined Communities: the Relationship between School Education and Local Media

研究代表者
福井　令恵（FUKUI, NORIE）

九州大学・学術研究・産学官連携本部・学術研究員

研究者番号：５０７２４０３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：北アイルランドにおいて歴史をどのように学ぶのか、学校教育と地域メディア（壁画）の関係に注目しながら検討し、以下の知見を得た。１）学校教育における歴史教育の内容については、蒐集した書籍および修了試験の分析からは、比較的バランスのとれたものになっていることがわかる。２）しかし学校制度のあり方から多くの生徒にとって、詳しく歴史を学ぶ機会は限られている。したがって地域住民の歴史認識の点で、公教育の影響は、限定的なものになる。３）壁画に描かれるイメージと教科書に掲載されている挿絵や写真には、相互参照が一部の歴史的出来事においてみられた。

研究成果の概要（英文）：This research has shown the following points: 1) History education in Northern Ireland is relatively well-balanced in terms of materials (such as books and visual materials) and examinations; 2) However, the impact of school education is rather limited since in the Northern Ireland education system, not many pupils learn local history in detail, especially topics related to modern Northern Ireland; 3) References between textbooks and murals (local community media) in Northern Ireland can be seen.

研究分野：文化研究

キーワード：住民集団間関係　学校教育　二つの歴史　紛争後社会　壁画

１．研究開始当初の背景

1969 年に、カトリック系住民とプロテスタント系住民との間で勃発した北アイルランド紛争は、1998 年のベルファスト合意（以下、和平合意）の締結により、一応の解決をみた。研究開始の時点で和平合意から約 15 年が経過し、北アイルランドの住民たちは、一見平和な日常を送っているが、紛争の影響は根深く、問題が根本的に解決されたという状況ではない。

こうした状況下、北アイルランドを対象にした社会学、文化人類学、国際関係学等の研究では、紛争後社会における＜文化＞の役割について検討されてきた。武力行使を封じ込め、平和的な手段で共存をはかっていかなければならない環境で、文化をめぐる言説や活動が、北アイルランドの住民集団間の争いの場になっている点に焦点をあてたものである。特に、従来優位な立場にあったマジョリティである、プロテスタント系の住民が、マイノリティに転落するのではないかという不安と恐怖から追い詰められ（「包囲の心理(siege mentality)」）、敵対的な主張を含んだ自分たちの文化の表現を強行し、それが和平プロセスにとっての大きな障壁となる点について議論されてきた。

北アイルランド社会の長年の対立の歴史的経緯のなかで、文化は二つに明確に色分けされ、ラベルづけされてきたことから、二つの住民集団間の分断を維持する文化活動について分析を進めることは重要である。特に北アイルランドのなかでも紛争の影響と被害の大きい土地に住む労働者階級の住民は、「強硬派」とみなされ、彼らの文化や文化活動は、和平プロセスの進展にとって障害となるものであり、対立関係を維持・強化する役割を果たしてきた点が、これまでの研究において指摘された。

本研究代表者はこれまで、強硬派と見なされてきた住民集団の文化活動である、壁画（Mural）を対象に集合意識や記憶の研究を行ってきた。壁画をめぐる活動や表現内容は、常に対立感情の維持として機能しているだけではないこと、また他方で彼らが別々の歴史的出来事や記憶をコメモレートし互いに共有することがほとんどないことを明らかにした。紛争後社会の分断状況克服を目指すという点で、後者のあり方は今後より重要になると考えられる。

２．研究の目的

壁画は主として紛争の被害の大きい地域に住む住民の手によって描かれてきたインフォーマルな地域メディアである。他方で、北アイルランドでは、分断社会の克服を目指して、学校教育においても、学校制度や歴史教育のあり方について、様々な工夫がされてきた。

インフォーマルなメディアとフォーマルな教育はどのような関係にあるのか。双方の関係性の検討を通じて、多面的に共同体意識の醸成のあり方を明らかにすることを目的にする。

３．研究の方法

本研究では、「研究の目的」を達成するために以下のような方法により研究を進めた。

（１）学校で使用される教材・書籍類の蒐集・分析

北アイルランドの小学校、中高学校の歴史関連科目の教科書として使用されている可能性の高い書籍類を蒐集・分析をする。

（２）学校制度の調査

カリキュラムと全国試験について調査する。これを学習用図書等の分析と重ね合わせることで、北アイルランドの歴史教育のあり方（どの段階で、どの出来事をどのように学ぶのか）について、全体としての傾向を把握する。

（３）歴史教育にかかわる関係者への聞き取り調査

教員養成大学の教員や北アイルランドの歴史教育の第一人者であるクィーンズ大学の研究者と面談する。また学校で歴史関連科目を担当している教師にインタビューする。さらにコミュニティで論争的な歴史的出来事を取り上げ、議論する成人教育のプロジェクトを進める研究者を紹介してもらい、意見交換を行う。

（４）壁画のデータ更新

これまで 10 年以上にわたって、北アイルランドのベルファストで壁画の調査を実施してきた。特に紛争の影響が現在まで強く残り、壁画の点数も多い、西ベルファストについては、重点的に調査を行ってきた。壁画は住民の手によって描かれる地域メディアと考えられるため、経年での変化を追うことで、地域において、何が重視されているのか、発信の内容について分析をすることが可能になる。

本研究では、こうした紛争影響の大きい地域を継続調査した。プロテスタント系住民の居住地区では特に大きな変化が認められた。また壁画に対する住民の認識に関して、複数の地域の関係者に話を聞くことができた。

４．研究成果

北アイルランドでは、公定の教科書は存在せず、各学校で複数の学習用図書・書籍・自作の資料や、様々な視覚教材等（パワーポイント資料、BBC のプログラムなど）を組み合わせて使用するケースが少なくないこと、そのため学校の「教科書」の使用状況についての詳細の把握は困難であることが明らかになった。

そこで、以下の方法で、「教科書」に近い

位置づけにあると思われる書籍を蒐集・分析した。

①教育委員会の担当者から紹介された、学校でよく使用される書籍の出版を手掛けている出版社に出向き、スタッフから学校への書籍の販売事情について話を聞き、現場の教員から注文のあったという書籍・ワークブックを収集した。
②北アイルランドの学校では、「教科書」は学校からの貸し出し方式のため、自習用にいくつかの書籍が地域の公立図書館などに備わっている場合、また大手の本屋で取り扱っているケースがある。そこで、図書館と書店においても、蒐集を行った。
③歴史教育関連の研究者や教員養成学校から得た情報をもとに、「教科書」の枠組みをやや広げ、資料蒐集を行った。

こうした調査により以下の点が明らかになった。

（１）壁画のイメージと教科書の挿絵
学校で使用される書籍でとり上げられているイメージ（写真・挿絵など）と壁画のイメージは、一部に相互参照関係がみられる点を確認した（キーステージ３用の書籍にとりわけ見られる）。書籍に載っている写真・挿絵を壁画で描き表現するケース、また数は多くないものの、壁画の写真を教科書に載せ、壁画が表現している歴史的出来事等を説明しているケースも確認できた。ただし、このケースは、全体からみると少数の特定の出来事のイメージに限定されている。

（２）学校教育の制度的分断
プロテスタントとカトリックの生徒が共に学ぶ統合校の伸びは、近年頭打ちになっている事、教員養成学校で別々に学ぶ仕組みが現在も優勢なことなどから、学校教育の制度的分断状況については大きな変化は認められない。
プロテスタント系とカトリック系の学校双方とも、共通カリキュラム（北アイルランドのナショナルカリキュラム）に沿う形で学校での教育がおこなわれている。しかしどの歴史的出来事をとりあげるのかという点は、学校および教師の裁量が大きい。したがって、共通カリキュラムの存在があっても、現場で学習する内容が同じとは必ずしもいえないことが明らかになった。

（３）階級と学校教育
壁画の多い、紛争の影響の色濃く残る地域の学校では、まずは基礎科目としての英語・数学の重視がされており、歴史関連科目は比較的重点がおかれない傾向があることが明らかになった。
小学校の教師、教員養成大学の教員、若者の教育支援活動を地域で実施する草の根組織の担当者、大学の研究者への聞き取りの結果、歴史を深く学ぶのは、高等教育への進学を希望し試験（GCSE、A-Levels 等）で選択科目の中から歴史を選ぶ予定の生徒に限られがちであることが示された。この場合は、論争の多い近現代史も含んだ内容、また複数の視点から歴史的出来事を学ぶことになる。教科書の内容や試験問題は、北アイルランドの歴史を複数の視点から考察する工夫がされており、その点で分断社会の克服を目指す教育内容になっている。しかし、選択科目で歴史を選び、そうしたバランスの取れた歴史を学ぶ生徒の数は決して多くない。

北アイルランドの学校の歴史教育の内容は、蒐集した教科書および、修了試験の分析からは、バランスのとれた内容になっていることがわかる。
しかし、現状では、北アイルランド社会の中での影響という点では、限定的なものにとどまるといえるであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）
(1)　Norie Fukui, “Murals in Belfast and Re-imaged Communities”, *Eire*, 日本アイルランド協会学術研究部、査読あり、Vol 36, 2017, pp46-64.

(2)　福井令恵、「分断社会の二つの歴史と共苦―北アイルランドのリパブリカン・コミュニティとロイヤリスト・コミュニティを事例として―」、『年報カルチュラル・スタディーズ(Cultural Studies Review)』、査読あり、第 2 号、2014 年、113―130 頁.

〔学会発表〕（計　3 件）
(1)　福井 令恵、「二つの民族集団間の境界線と都市空間における表象--北アイルランドの地域メディアと学校教育に注目して」、日本社会学会、2016 年 10 月 8 日、九州大学.

(2)　福井令恵、「分断社会と歴史教育に関する予備的考察　―北アイルランドの事例から」、2015 年 12 月 12 日、下関市立大学.

(3)　Norie Fukui, “Representation on Experience of Suffering in Urban Space: Wall Murals in Belfast”, XVIII ISA World Congress of Sociology, 2014 年 7 月 16 日,Pacifico Yokohama.

〔その他〕（計　3 件）
(1) 福井令恵、「北アイルランドの壁画：地

域コミュニティと壁画の役割の変遷」、『大分県アイルランド研究協会会報』、第 33 号、2017 年、1-4 頁.

(2)福井令恵、「北アイルランド社会と壁画―和平合意以降に注目して―」、『cara』、日本ケルト協会、第 24 号、2017 年、6-12 頁.

(3)福井令恵、「北アイルランドの今―壁画と教育からみる分断とそこに生きる人々―」、『広島日英協会会報』、第 112 号、2017 年、2-5 頁.

６．研究組織

(1)研究代表者

福井　令恵（NORIE FUKUI）
九州大学・学術研究産学官連携本部・学術研究員
　研究者番号：50724035